

少子高齢化と医学の進歩によって、小児の理学療法を取り巻く医療システム、支援領域は、近年大きく変化している。とくに低出生体重児、脳性麻痺児、二分脊椎症などに対する小児理学療法は、超早期医療から統合保育、学校教育から就労支援へと児のライフステージに寄り添った幅広い領域まで拡大し、そのニーズは一段と高まっている。

そこで本号では、小児理学療法に関する治療技術、医療体制の変遷を踏まえ、現在の医療機関、卒前教育における小児理学療法の取り組みと新しい展開について特集企画した。

■脳性麻痺の理学療法の変遷と展開（山川友康，他論文）

1942年に日本で最初の肢体不自由児施設が開設されてから、日本の小児療育はほぼ70年が経過した。他方、理学療法士による小児理学療法が開発されて以来、約45年が過ぎた。この間、周産期医療の進展、障害福祉理念や当事者意識の変化、発達障害者支援法や障害者自立支援法等の法整備、特別支援教育の開始など、小児療育や小児理学療法に影響を与える社会状況の変化が目覚ましい。現状における小児理学療法の課題と展開について述べる。

■NICUにおける理学療法の変遷と今後の展開（國田広規論文）

NICUは1970年代初頭から設置され始め、1980年代には理学療法士が介入し始めている。近年少子化傾向となっているが、超低出生体重児に関しては増加傾向であり、神経学的に異常を伴う児に関しても増加傾向となっており、依然NICUの必要性は変わらない状況である。NICUにおける呼吸理学療法の変遷とNICU内における発達評価の紹介、退院後のフォローアップの状況について報告する。

■小児整形外科疾患の理学療法の変遷と展開（平井孝明論文）

整形外科は小児整形外科から発展し古来より先天性疾患の存在が推測される。小児整形外科疾患に対する理学療法士の関わりは整形外科治療の発展に追従しながらも、日常生活における具体的な機能的動作目標の改善に向け他職種や施設スタッフとの連携のもとで長期的展望に立ち実施されなければならない。今回二分脊椎、軟骨無形成症、ペルテス病、脳性麻痺児に対する当センター整形外科の治療の紹介と理学療法の関わりにつき報告する。

■特別支援学校における理学療法・士の関わりと展開（小玉美津子論文）

神奈川県立特別支援学校において理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士の4職種27名が県内15校に常時配置された。従来の医療モデルの直接支援とは異なり、教員との協働というスタイルで児童・生徒への学校生活を支え、より専門的な視点でアセスメント・指導計画の作成、指導・評価を行うことや、特別支援学校におけるセンター的機能の強化を図ることを配置の目的としている。

■小児理学療法の卒前教育の変遷と展開（大城昌平，他論文）

本稿は、小児理学療法の卒前教育の現状と課題について、養成校のアンケート結果をもとに分析し、これからの小児理学療法教育の展開を提言した。アンケートの結果から、卒前教育の状況は、カリキュラム、臨床実習、就職などにおいて極めて厳しく、分野の衰退が危惧された。日本理学療法士協会、小児領域に携わる理学療法士、教育機関の教員がこのような現状を認識し、協議して解決の糸口を見出していかなければならない。

■とびらページ(p451)の作品について：作———牧野文幸氏（口と足で描く芸術家協会）

あ 知さあ 乃 うへ
「紫陽花の 花の上ふく はやてかな」 松浦青々

■プレゼントのお知らせ 抽選で1名の方に、牧野氏の作品を差し上げます。巻末のアンケートはがきに「プレゼント希望」の旨と、希望の作品が掲載された号数をお書き添えの上、編集室までお送りください。

■とびら本文の引用について

「地図のない道(新潮文庫、2002)」より「ザツレの河岸で」、「コルシア書店の仲間たち(文春文庫、1995)」、「ユルスナールの靴(河出文庫、1998)」、いずれも須賀敦子。